

11月19日(火)～23日(土)

第10回モントリオール国際舞台芸術見本市(シナール)

カナダ(モントリオール)

モントリオールにおいて、芸術見本市(シナール)が開催されました。芸術見本市とは、他の商業見本市と同様に、演劇やダンスのカンパニーがブースを出展して自身の公演を売り込み、劇場やプロモーターが買い手となって交渉を行うという、文字通りの「マーケット」です。その他舞台公演に関するシンポジウムやショーケース等も多数開催されるため、世界中の舞台芸術関係者が一堂に会します。そこでは各国の最新の舞台芸術情報も入手でき、また人的交流も盛んに行われます。今回のシナールにも、ブースが156、ショーケースが150公演、60カ国から700人以上が参加しました。

当基金では、この場において日本の舞台芸術を効果的に紹介するため、ダンスと音楽の専門家2名を派遣し、現代の日本を代表する公演団を紹介するビデオプレゼンテーションを行いました。また東京芸術見本市と共にブースも出展し、日本の舞台芸術に関する問合せに対応しました。

ビデオプレゼンテーションには、定員一杯の80名の参加者が詰め寄せ、熱心に専門家話に聞き入っていました。またブースにも「日本のダンスカンパニーとコラボレーションをしたい」「日本から公演団を招へいしたい」「自分の開催するフェスティバルに参加してほしい」等の問合せが殺到し、終始対応に追われました。



ビデオプレゼンテーションとブースへの来客が大変多かったことは、日本の舞台芸術への関心の高さを如実に表しています。シナールは2年に一回ですが、この他にも世界中で芸術見本市が開催されています。需要がありながら不足しがちな日本の舞台芸術事情について、このような機会を利用して、積極的に海外に向けて情報発信を行っていく必要性を強く感じました。

特定寄付金

日本国内の企業や個人が国内外の国際文化交流事業に対して寄付を計画している場合に、特定公益増進法人である当基金が寄付を受け入れ、その寄付金を原資とした助成金を当基金から事業実施団体に交付することによって、寄付金を税制上の優遇措置の対象とできるようにする制度です。この制度を通して、当基金では、広く企業や個人が国際文化交流に寄与することを支援しております。受け入れ事業は、年二回開催される審査委員会で決定されます。

一般寄付金

寄付の時期、寄付額ともご寄付いただく方の任意でお決めいただく寄付金を受け付けております。寄付金の使い方には、(1) 寄付いただいた年度に使い切る方式と、(2) 寄付金をファンドとしてその運用利息を恒久的に使う方式とがあります。ご希望の方式で、国際文化交流事業へのご支援をお待ち申し上げます。

会 員

年会費として一定額以上のご寄付をお願いする会員になっていただきますと、定期刊行物の送付や図書館の利用、催しへのご案内等、様々な特典がございます。会員制度には「賛助会」(個人一口2万円、団体一口10万円)、「友の会」(個人のみ。一般4千円、学生2千円)の2種類がございます。当基金へのご寄付はすべて税制上の優遇措置の対象となります。随時ご入会を受け付けております。国際文化交流事業の一層の発展・普及のため、皆様の温かいご支援をお願い申し上げます。

高円宮憲仁殿下が2002年11月21日に薨去されました。殿下は国際交流基金に昭和56年より21年間嘱託勤務され、国際文化交流に情熱を注がれました。

ここにご冥福をお祈り申し上げると共に、亡き殿下を偲んで機関誌「国際交流」第98号（2003年1月刊行）に掲載しました追悼文をここにご紹介いたします。

高円宮殿下を悼む

国際交流基金理事長 藤井宏昭

20年余りにわたって苦楽を共にしてくださった高円宮殿下が急逝されたことは、私たちにとって痛恨の極みです。文化を愛され、ご造詣が大変深いことはいうに及ばず、国際交流の確固たる信念に基づき「文化交流は人に始まり、人に終わる」という基本理念を自ら体現されていたという意味で、殿下は日本の国際文化交流にとってかけがえない存在でした。愛してやまない殿下のお姿がいつものお席に見られないという事実を、私たちはいまだ現実のものとして受け止められずにいます。

高円宮殿下は一貫して「私たちの殿下」でした。毎年、国際交流基金賞では、候補者推薦データの入力や授賞式当日の受付も共にご担当くださり、日本各地で開催された文化紹介講演会では、講師の出演交渉から随行者の切符手配まで直接ご自身でなされ、ときに「三笠さんという人になって」随行もされたと聞きます。目にも止まらぬ速さでご愛用のワープロを打ち、警護官を助手席に乗せ自らハンドルを握って昼食に行かれ、終業の鐘の鳴る前に「ちょっと早めに失礼」とお帰りになるお姿に、私たちはごく自然に接してきました。

殿下が私たちにとっての日常だったように、殿下にとっても国際交流基金は「常の場」であったと信じます。総務課ホワイトボードのご自分の欄に殿下が書かれるのは、次に基金にいらっしゃる日ではなく、いらっしゃらない日のみであったといえます。最近のご公務がお忙しく、かつてのように基金に時間を割くことが難しくなり、一抹の寂しさを感じておられたかもしれません。80年代前半に職員有志が写真を持ち寄って編集した手作りのビデオを殿下はいつも懐かしみ、亡くなる日まで机の引出しに大切にしまっておられたと聞きました。殿下の周りにはいつも人が集い、冗談を言い合い、ときに酒を酌み交わし、私たちは皆、ひとりの人としての殿下を愛しました。

殿下は晴れ晴れとした「こころの人」、きっぱりと誠実でまっすぐな方でした。人の人たる所以を、心の何たるかを誰よりも理解し、透徹した眼差しで国際交流基金を見つめ、いつくしんでくださいました。心あるひとりの人を、もうひとりの心ある人として見つめる関係が至るところで発生して「人々」の交流となり、それら人々が織りなす心の交流が地球的に広がるのが、そしてそれを最後まで穏やかに守り通すゆるぎなき信念と熱き思いを持ち続けることが、文化交流の基本であるということをご経験されておられる方でした。

20年余にわたり、殿下は基金の歴史を見守り、節目節目に私たちと時を共有してくださいました。1984年のパリにおける欧州日本研究会や2000年の沖縄サミットのシンポジウムには基金職員としてご出張され、現地で活躍されたと聞きます。設立30周年にあたる2002年10月には、国際交流基金賞授賞式に皇太子同妃両殿下のご臨席を賜わるべくご奔走くださり、最後までご一緒に準備にあってくださいました。「私は職員みたいなものだから」と式典の壇上に登ることを断られた殿下。「基金が置いてくれるうちは、基金にいるんだ」と言っておられたという殿下。基金の歴史をつぶさにご覧になってきた殿下の眼は、新しい時代の国際文化交流をどう見つめておられたのでしょうか。殿下の生きた言葉で私たちに語り続けて戴き、「心ある人々の心ある国際交流」の実現に向けて一緒に歩んでほしかった。もはやそれがかなわなくなっただけで、癒されることのない悲しみを胸に、私たちは、殿下の文化交流へのゆるぎなき信念と国際交流への眼差しを保ち続けてゆくことが、残された者の使命であると強く感じています。

（「国際交流」第98号）